

宰府画報

第31号

2026年7月

(令和8年)

発行

太宰府市教育委員会
文化財課

バックナンバーはこちらから

逸品探訪

春景山水図

齋藤梅圃作



紙本墨画淡彩 屏風装(6曲1隻) 120.5 × 331.6cm 幕末～明治初期 個人蔵

齋藤秋圃の後を継いだ梅圃(1816～75)は、確認される現存作品数が20点程度と少なく、その画業や画風について知るところは多くありません。本作は、太宰府の絵師調査事業を御存知だったという方から情報提供を受けて新たに確認された、梅圃の屏風作品としても初確認となる逸品です。

6曲1隻の大画面に描かれるのは中国の山水風景。画面中央には水面が大きく広がり、向かって左手に山々を背にして立派な楼閣が描かれています。室内ではひとりくつろぐ文人の姿。下方の近景には、樵夫、杖をついた人物、童子と従者を連れた騎驢人物が、ゆったりと歩みを進めています。梅の花が咲き誇り、柳も新緑の様子で、清らかな春の風景に仕立てられています。

小柄で丸みのある人物のプロポーシヨンや、画面中存在感を放つ松の表現などに、秋圃ゆずりの雰囲気を感じられる一方で、眼光の強い目元の表現や、秋圃と比較するとひと筆の

長さが短い点などは、梅圃の作品に共通する特徴です。いずれにしても、大画面を破綻なくまとめる構成力と堅実な描写力には、梅圃の画技の確かさと円熟味が感じられます。画面の右上方に「梅圃」の署名と白文方印(印文不詳)がひとつあります。

制作年の判明する梅圃作品は、12歳の若描きである絵馬《金時図》(嘉麻市・馬見神社)を除いて、安政4年から慶応3年(1857～67)まで、40歳から50歳までの期間に集中しています。安政6年に秋圃が没するのと前後して、梅圃が精力的に活動していた様子が窺えます。本作に関しては、文久3年(1863)奉納の絵馬《新田義貞鎌倉攻図》(筑紫野市・扇祇神社)の署名と印章が酷似しており、この頃以降、没年の明治8年(1875)頃までに描かれたものではないかと考えています。

梅圃研究において重要な意味を持つ新発見。本作の調査経緯については次ページの「調査見聞」を御覧ください。(井形栄子)



部分拡大



調査見聞

筑後地方の旧家の絵画

— 知られざる文化財の宝庫 —

木蟬、養蚕業で一家をなした旧家

梅園作品(表紙で紹介)があるとの情報を受けて向かった先は筑後地方の某所。梅園の初めての屏風が見られるということでドキドキしながら伺ってみると、それはたいそう立派なお屋敷で、当地では知られた旧家ということでした。現に所有者の方がお住まいで一般公開などはされていませんが、今回特別に御許可をいただき調査をさせていただきました。



(上) 主屋1階《山水・鯉魚・花鳥図襖》 上田鉄耕作 明治初期
(下) 主屋2階《群鶴山水図襖》 作者未詳 明治初期

当家は江戸期には木蟬業、明治期は養蚕・製糸業で一家を成したといひ、2階建ての主屋、離れの座敷、格式高い薬医門や土蔵などが現存しています。主屋には明治6年(1873)の棟札、離れ座敷には同38年(1905)の棟木墨書があり、明治期の建築と確認されています。目的の梅園の屏風は、主屋1階の玄関棟に保管されていたそうです。

明治前期の貴重な襖絵群

せっかくの機会ですから、有り難くもお宅を拝見させていただきましたが、主屋には建築当初からのものと思われる襖絵群―表裏合わせて8主題42面―が現役で設えられていて、まさに圧巻。このうち1階の仏間の三方を囲む《山水・鯉魚・花鳥図》14面は、博多の絵師上田鉄耕(1849~1914)の作と判明します。鉄耕は福田溪仙ほか多くの画家を育成した福岡の近代日本画の重鎮とされますが、梅園と同様に確認される作品は少なく、洗練された画技を示す本作は、明治初期の鉄耕の作画状況を知る上でとても貴重です。また、この仏間の床の間には、保存状態も良好な、吉嗣梅仙の秀麗な花鳥図がありました。「梅仙」のあとに名の「寛」を付けた「梅仙寛」の署名は、慶応年間から明治10年頃までの作品に使用例が多いもので、本作も主屋の完



吉嗣梅仙《花鳥図》
紙本著色 掛幅装 明治初期

成と前後して作られたものと推察されます。

さらなる発見の可能性

設置の襖絵に上田鉄耕以外の落款はありませんでしたが、帰り際にちらりとだけ拝見した、収納箱に保管されていた襖絵のひとつには、御原郡本郷町(大刀洗町)生まれで修猷館に進み、のち京都美術工芸学校で学んだという、岡西湖(1881~?)かと思われる作者の署名と明治37年(1904)の年記があり、筑後地方ゆかりの画家も襖絵制作に関わっていたようです。現存作例の少ない画家の作品があると言うのみならず、作品はどれも秀でた画技を示していて、しかも保存状態が良いことが特筆されます。当家には未調査の資料がまだ多くあるとのこと。さらなる新発見の可能性が秘められているようです。(井形栄子)

※参考文献『福岡県日本画古今画人名鑑』(野田正明編、筑後画廊、1987年)／『福岡県の近代和風建築―福岡県近代和風建築総合調査報告書―』(福岡県文化財報告書第269集 福岡県教育委員会、2018年)

謝辞

調査にあたり、所有者の皆様、古賀建築事務所古賀友貴氏ならびに関係各位に格別の御配慮を賜りました。末尾ながら、ここに記して御礼申し上げます。

いちまい

画稿鑑賞

齋藤家資料

海の風景

7月20日は海の日。今回紹介するのは、唐津^{からつ}の海を描いた1枚です。

高いところから見下ろすような視点で、中央に広がる水面を左右から突き出た岬^{みさき}が抱き込む入江と、その向こうに広がる海が描かれています。岸には松林が連なり、入海には川船、海には帆船が浮かんでいます。画中の文字をみると、左側の岬に「ワタリ村」、その岬の向こうにある丸

石に「サヨヒメ」、右側の岬には「唐津御茶ヤ」、その向こうに浮かぶこもりとした島に「タカシマ」、水面には「マツラ川」の名が記されています。この図が、松浦川の河口から唐津湾にかけての風景を描いたものであるとわかります。

「サヨヒメ」とは、『万葉集』にその歌のある松浦佐用姫^{まつうさようひめ}のことで、任那^{みまな}に赴く恋人の



《諸国名所図 唐津湾図》 紙本墨画淡彩 一冊 26.2 × 19.1cm

大伴狭手彦^{おほとものさてひこ}の船を唐津の鏡山の峰に登って見送ったという女性です。

悲恋の伝説を思いながら、この唐津湾図を眺めていると、現地を旅行した気分になります。近年太宰府市は最高気温で全国10位内に入るようになりました。酷暑の中でもクーラーの聞いた部屋で唐津の海を満喫できますね。

(小林知美)

メイショ
メイブツ

高橋紹運岩屋城史談

今から440年前の天正14年

(1586)、四王寺山^{しおうじやま}の岩屋城^{いわやじょう}で起きた岩屋城合戦は、高橋紹運^{たかはししょううん}がわずか700名余りの兵を率い薩摩国島津氏^{さつまのくにしまづ}の大軍勢を迎え撃ち、全員が討ち死にしたと伝わる戦国時代でも有数のエピソードで知られます。紹運は当時劣勢だった大友氏を裏切らなかつた忠義の武将として顕彰され、江戸・近代にかけて多くの軍記物で描かれました。

『高橋紹運岩屋城史談』は明治40年(1907)に郷土史家・江島茂逸^{えしまじげとし}が刊行したもので、筑後の領主高橋氏が太宰府にきてから岩屋城合戦を経て江戸時代に顕彰されるまで記したものです。本書の末尾にあるのが吉嗣拝山の漢詩です。七言律詩という全56字の形式で、激戦を繰り広げた高橋紹運の功績が力



『高橋紹運岩屋城史談』明治40年
太宰府市文化ふれあい館蔵

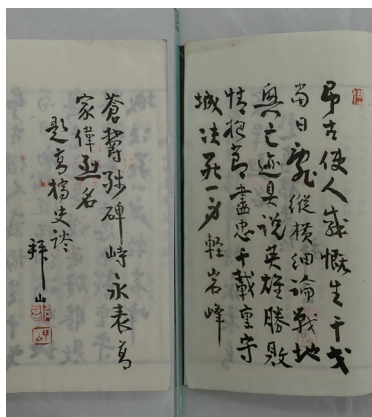
強くたたえられています。

江島は、明治34年(1901)2月から5月にかけて福岡日日新聞で高橋紹運の連載をしており、その内容が『高橋紹運岩屋城史談』の基になっています。拝山はこの連載を読み、深く感銘を受けて新聞社へ葉書で漢詩を贈り、それが本書の末尾に掲載されることになったようです。

拝山は、明治27年に江島が『維新起源太宰府紀念編』^{きげんださいふきねんへん}を刊行した際にも詩を贈るなど、折にふれて交流があったようです。

本資料は8月8日から開催する「まると太宰府歴史展2026」で展示されます。ぜひご覧ください。

(木村純也)



吉嗣拝山の漢詩

関係者
名鑑

Vol.10

続・千家尊福

生没年 弘化2〜大正7（1845〜1918）
関係者 吉嗣梅仙・拝山

プロフィール

出雲大社国造第80代。明治18年（1885）に太宰府を訪れた。本誌第28号（関係者名鑑Vol.8）を参照。

千家尊福の経歴や吉嗣家との関わりについては以前紹介しましたが、今回は尊福から吉嗣梅仙の古希祝いに贈られた和歌について深掘りします。

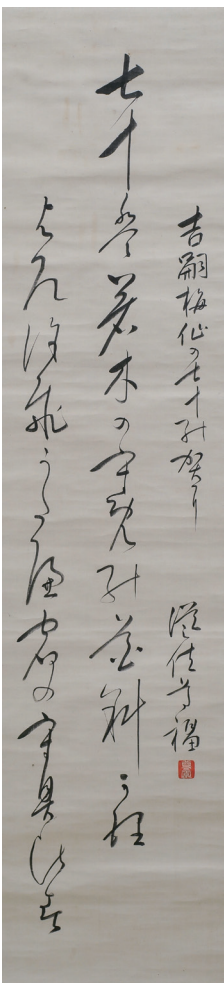
左写真の書には「吉嗣梅仙の七十の賀に／從二位尊福／七十は若木のうめの花ざかり／よろこびうたへ宿のうぐひす」とあります。「賀」は長寿の祝。当然ですが、賀歌は相手の益々の長寿を祈ります。

歌の初句は「ななそぢは」と読み、「70歳は若い梅の木の花盛りのようだ」とことほいでいます。普通に考えれば70歳は若くないし、梅でも若木とは言えないでしょう。ここで思い出されるのは渋沢栄一の名言とも伝えられる

「四十五十は渾垂小僧、六十七十は働き盛り、九十になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ」です。なるほど、70歳は働き盛りで「花盛り」なのか。と近々70歳を迎える私も励まされました。このときの祝賀の甲斐あつてか、梅仙はこのあと十年も寿命を延ばしています。

梅仙の古希祝いは明治19年秋に催されましたが、この歌は「梅の花盛り」と春の情景を詠んでいます。単に梅仙の名を梅に見立てた歌と読み取ることできますが、「喜び歌へ宿の鶯」とここでも春の訪れを告げる鶯が出てくることから、春に歌の制作依頼があったのかも知れません。同じ祝に三条実美が寄せた書（吉嗣家資料・書画編No.264）が「桃花」を取り上げていることも傍証になりそうです。

（赤塚睦男）

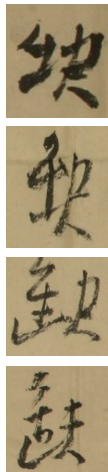


和歌「七十は」 絹本墨書141.5×33.6cm 吉嗣家資料

ひとこと
くずし字

【 缺 】

「缺」には、かけて足りない意味があり、「欠」とは異体字の関係にあります。もともと別の字でしたが、意味が似ているため混用して使われるようになったようです。漢字の構成として、部首は「缶（ほとぎへん）」で、「夫」はかけた様を表します。今回は異なるくずし方をする「缺」を紹介します。



① ② ③ ④
①②③では、右側の「夫」を「尺」のようにくずしています。左側の「缶」については、①は「ノ」と「土」を組み合わせた形に簡略化し、②では「缶」を「干」と「一」を組み合わせた形に省略し、③では「条」と「L」を組み合わせた形に変えています。

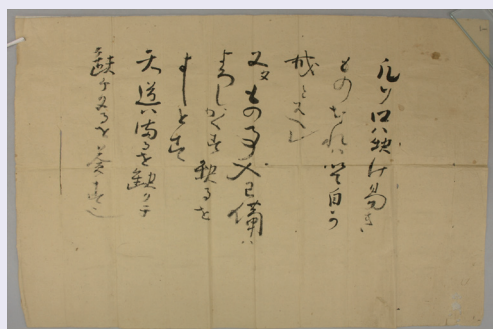
④では、右側の「夫」を「夫」のよな形に変化させ、左側の「缶」は上から順に「ㄱ」・「古」・「L」を合成した形にしています。

この資料には以下の内容が記されています。

「凡そ口は欠け易きものなれば、以て自ら戒とすべし。又々物事全備はよろ

しからず、欠けるをよしとす。天道は満つるを欠けて、欠けたるを益すなり」言動には気を付け、完璧を求めすぎず、不足があるくらいがちょうどよいという人生訓です。「缺」という字が全て異なる崩し方で記されているのも、完璧でない様を表しているようで味わいがあります。（長野晃久）

この資料



〔教訓書付〕 31.2 × 38.7cm 齋藤家資料

編集後記

今年には岩屋城合戦から440年。吉嗣拝山も称えた高橋紹運の活躍を「まるごと太宰府歴史展」でご覧ください。（木）

令和8年度も4か月が過ぎました。吉嗣家資料報告書「画稿類」編もそろそろ佳境。きつ、たいへん、それが醍醐味です！（井）